



「国立高専だより」創刊にあたって

独立行政法人 国立高等専門学校機構 理事長
工学博士 河野 伊一郎

国立高等専門学校（国立高専）は、我が国の産業経済の高度成長を背景に、産業界の強い要請に応じて、1962年に「実践的、創造性のある技術者の育成」を目的として設置され、以来中学校卒業の15歳の学生に5年間一貫教育を授け、これまで約35万人の卒業生を送りだし、我が国の今日の発展を支えてまいりました。

国立高専は、実験・実習・実技等の体験的学習を重視したきめ細かい教育指導により、創造性豊かな実践的技術者の養成に努めており、4年制大学とは一味異なる特色ある高等教育機関として産業界等から高い評価を受けています。国立高専卒業生に対する企業からの求人倍率は景気の動向を大きく受けることなく、10数倍という高倍率を維持し、就職率はほぼ100%の実績を有しています。とりわけ、多くの技術者が定年を迎え、技術力の伝承が課題とも言われている昨今、今春の卒業生への求人倍率は約16倍となっています。また、国立高専卒業生の約4割はさらに高度な技術・知識を身に付けるため高専に設けられている2年制課程の専攻科（学部レベル）や4年制大学工学部等（ほとんどは国立大学）の3年次に編入学しています。

平成16年4月、全国の55国立高専を設置・運営する機関として独立行政法人国立高等専門学校機構が設置され、3年目を迎えています。機構では、55の国立高専が一つの法人になったことにより、そのスケールメリットを活かして、「個性輝く、魅力ある国立高専」を目指して、機構と各国立高専の連携のもと新たな企画と発展への取り組みを始めています。すなわち、教育研究活動の活性化、高度化はもとより、予算の重点配分による教育環境の整備、教員等の人事交流の促進、地域社会との連携強化、業務の効率化などがあります。

以上のような実績を有する国立高専ではありますが、社会的にはその認知度は決して高くありません。本広報誌を通して、少しでも多くの方々に国立高専の現状、国立高専のすばらしさなどを知っていただくとともに、忌憚のないご意見等をお寄せいただければ幸いです。今後とも、各高専の活動状況、トピックスなどを紹介するなど、わかりやすい広報誌作成を目指して努力する所存でありますので、よろしくお願いたします。



高専教育の特長

Feature of education

はじめに

東京工業高等専門学校／副校長 津田 潔

工業高等専門学校は、その卒業生数が大学卒業生の1%に満たないこともあって、世間的な認知度は決して高くはありませんが、親子、兄弟の卒業生が非常に多いことから分かりますように、知る人ぞ知る極めて優れた教育機関と言えます。高専によってその数字は多少異なりますが、卒業生の半数近くが国公立大学の3年次に編入学し、就職に関しては驚異的な求人倍率を誇っています。

ここ数年来、中高一貫校や小中一貫校の出現など、画一化した日本の教育制度にもようやく多様化の兆しが見え始めてきました。中でも中高一貫校は非常に評判が良く、最近の一つの流行になっているとさえ思われるほどです。

ところが、高専は既に40年前から存在する高大一貫校なのです。大学受験テクニックの習得だけに費やされる1・2年間を、基礎学力の充実や自己の興味の追求に充てるのが出来れば、どんなに良いか。そうした親や生徒たちの願望を叶えることができるのが工業高等専門学校であり、中学卒業生を受け入れて5年一貫教育を施すという意味で、それは理工系の高大一貫校だと言えます。

国立高専は全国に55校あり、公立私立を含めると62校になります。それぞれの地域の事情や各校の教員達の考え方により、様々な特長を持つことは言うまでもありませんが、以下、その主な特長を4つに分けて東京高専を例に説明しましょう。

1 2 3 4 高大一貫教育

高専の教員は、5年間の高専教育をほぼ2年+3年と区切って考えています。即ち高校3年間で2年で、大学4年間で3年で修得させることを目標にしているのです。従って、最近極めて評判の悪い「ゆとり教育」とはほとんど縁がないと言っていいと思います（注）。

高専は前後2期制であり、大学同様1コマ90ないし100分で年間30回の実授業時間を確保しています。数学は2年で高校3年の内容をほぼ終え、1年前期の試走期間を終えると徐々に加速していき、3年生では工業系大学の1年レベルの線形代数や解析学を扱います。物理や化学も2年間で高校の授業内容を終えます。英語は低学年では図書館などを利用して多読の授業を行って実用的な語彙力を上げ、高学年では企業で重視されるTOEICの点数向上に特化した授業を行っています。同時に、英検2級以上の取得者には特別に単位を出し、TOEIC 400点以上の者を表彰するなど、目標を明示し勉強意欲をかき立てるようになっています。無論このようにするためには、習熟度別授業、個別指導型授業、オフィスアワーの活用、e-learningの利用など、教育上の様々な試みと工夫が行われています。外国人講師による授業などは言うまでもありません。